

2章 環境と関わる～子どもが考える・つくる～

本章では、「環境と関わる」をテーマに、子ども自身が環境と関わり向き合い、考えたり・つくりだしたりする姿に注目しています。乳幼児期の教育及び保育は、乳幼児期の特性と、子どもや保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うことが基本とされています。「科学する心」を発揮する子どもは、大人では思いつかないヒラメキと発想をもって、環境と自分との関わりで豊かな体験をしています。この章では、大人の視点で環境を構成・再構成することよりも、子どもが自ら環境を使いこなしたり、つくったり、環境について考えたりしていく過程を捉えている事例をご紹介します。保育者が、子どもの視点に立ち、子どもの思いや立場になって、共に環境を考え・つくり出していくことの大切さが伝わってきます。また、子どもたちが環境と関わる姿を支える保育者にも、試行錯誤があり、探究があり葛藤があります。子ども自ら環境と関わり、じっくり向き合う時間と場を保障された保育により、「科学する心」は育まれ、ひいては保育の質の向上に結びついていきます。

実践1：「命に向き合う時～みんなで出した結論だから～」（5歳児）

（学）仙台みどり学園 幼保連携型認定こども園やかまし村

子どもたちが外来種オオクチバスと出いました。“生きている命を絶たなければいけないこともある”現実を知り、疑問や課題を追求していきます。保育者も、子どもと共に揺らぎ、悩み、子どもの心の声や言葉を聴き、子どもたちとともに深く探究していきました。子どもたちが熱中し続け、プロジェクト活動に展開した「けやきのもり水族館日誌」。子どもたちの熱中する姿や、疑問をもつ様子、そして葛藤を繰り返しながらも、クラス全体で納得できる一つの結論を導き出す過程に「科学する心」の育ちが顕著に読み取れます。



実践2：「のっばらプロジェクト」（0～5歳児）

世田谷区立希望丘保育園



園内に子どもたちが、“のっばら”を創る！？ 聞いているだけでもワクワク感が伝わってきます。どんな風に創るのだろう？ 都会の園の園庭にも野草は根付くの？ 生き物は住み着いてくれるの？ 0歳児～5歳児までの子どもたちと保育者と保護者が一体となって創り出す“のっばら”での体験からは、子どものさまざまな「科学する心」の育ちが際立って見えてきます。「のっばら図鑑」「のっばらグラム」などの保育の可視化も、子どもたち一人一人が主人公になる工夫は、「科学する心」を育むツールとしても参考になります。

実践3：「見て一電車だよ！」（2歳児）

企業主導型保育所 保育園にじのおうち

周りの環境に自ら関わり、「おもしろい、見つけた」と、楽しい遊びにになってしまう2歳児の姿です。影と日向での気づき、物によってできる影の違いへの気づき、自分の生活と結びつけての遊びなど、この時期に、周囲の物・こと・人と出会い、面白いとよく観たり見立てたり、気づいたり、など環境と主体的に関わることが、「科学する心」の育ちにつながります。日常の見逃しがちな子どもの姿を、保育者が注視し、心を寄せて共感していくことの大切さが伝わってきます。



実践4：どうしてアサガオが育たなかったの？（5歳児）

（福）芽豆羅の里 幼保連携型認定こども園 めずらこども園



「アサガオの栽培って失敗することあるの？」種を蒔けば、発芽して育つと思っていた子どもたちと保育者。思いがけない失敗により、子どもたちの「科学する心」が、発揮されていきます。アサガオにとっての「環境」を考えていく子どもたちの試行錯誤や探究心が伝わってきます。そして、その過程をみんなに伝えるために、子どもの気づきから、可視化の環境を作る姿に展開します。園全体や保護者との共有によって、子どもたちの自信や意欲がさらに膨らんでいきます。

実践5：ティラノサウルスを作りたい(5歳児)

つばさ保育園

5歳児の、「本物の大きさの恐竜を作りたい！」思いから始まった恐竜作り。子どもたちの思いは、保育者の発想を超えて広がっていきます。ティラノサウルスが、15mと知った子どもたちは、自分たちで、その大きさを作り出そうと取り組み始めます。今までの経験をフルに生かして、身近な素材や材料に関わり、試行錯誤しながら実現していく姿に「科学する心」の育ちを読み取ることができます。子どもたちが、いかに今まで自ら環境と関わり心動かしてきたか、保育者たちが、いかに子どもの興味・関心に寄り添い続けてきたのかも伝わってきます。



* 他の実践に見られる子どもと環境との関わり *

他の園の実践に見られる、「子どもが環境を考える・つくる」など、子どもと環境との関わりに注目した事例をご紹介します。子どもが、身近な生き物や植物の立場になって環境を考える姿に「科学する心」の育ちを読み取ることができます。

カタツムリに思いを寄せて

京都市立明德幼稚園

- ・ 6月中旬、5歳児の子どもたちは園庭のカタツムリに興味をもって関わっていた。前日、Aさんが「(カタツムリの)家を広くしたい」と話していたので、保育者は、大きな飼育ケースを準備した。大きな飼育ケースを喜び、早速、図鑑で調べ、**畑の土を入れたり「木がいる」と話したりしながら作っていく。**
- ・ 以前から使っていた鉢の欠片も「(カタツムリが)気に入っているから」と入れた。「カタツムリの家」ができたが、Aさんは「**すぐに(新しい飼育ケースに)入れるのはかわいそう。**遊ばせてあげよう」といつもの板で遊ぶ。飼育ケースからカタツムリを出す、ゆっくりしているカタツムリを見つけ「**ねぼすけさんは置いておいてあげよう**」としばらく様子を見るようにしていた。
- ・ 遊ぶ準備をしている間に、「ねぼすけさん」は動き出し「**ほら、起きはった。新しいお家になったんだよ**」と言っていた。その様子を見たり、聞いたりしていたBさんは、Aさんの思いに共感し、受け入れている様子だった。板の上では、木の枝を進むカタツムリを見て、Aさんは「**こんな細い所も行けるんだ。すごいな**」と話すと、**カタツムリの家にも「中にも細いのを入れたらいいかな**」と思いついたことを言った。AさんとBさんの他に、Cさんも加わり「**もっとお友達を探そう**」と探しに行き、一匹見つかるAさんは「**そーっと置いてあげよう。急にお家が変わってびっくりするかもしれへんし**」と、カタツムリの気持ちになって考えて話し、Bさんもその様子を見守った。



鳥さんから野菜を守ろうプロジェクト (学)共立学園 認定こども園新光明池幼稚園



(SDGsに関わる取り組みの一つ)園のすくすくファームで野菜のお世話をしていた5歳児が、実った野菜を、ネコやカラス等の鳥たちが食べにやってくることを知った。みんなで緊急に話し合いをした。「**せっかく大きくなってきたのに…**」野菜を守りたい子どもたち。「**でも、鳥さんもやつつけないし、いじめたくない**」という大きな思いもあった。「**何か方法はないかな?**」と、みんなでいっぱい考え合った。鳥が嫌がることは何なのかを調べ、

キラキラ光る「手作り風車」を作って「**自分たちの力で野菜を守ろう**」ということになった。

4歳児3歳児さんにも協力してもらい、それぞれのクラスの畝に風車を立てた。

